

## 『視霊者の夢』におけるカントの啓蒙観

高知丸の内高校寺尾隆二

1766年著者名なしにケーニヒスベルクで刊行された『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』と題する論文の著者が、本当にマギスター・カントなのか、アカデミーの懸賞論文の著者なのか、「人々はそれについて疑問に思ったであろう、それ程本書のもつ音調は人々の心に奇妙に、かつ奇異に響いたに違いない」<sup>1)</sup>と、このようにカッシーラーは伝えている。確かに本書はそれまでに著されたカントの哲学的論文とは異なっており、世間や友人たちの期待を裏切るものでもあった。またカントが、その生涯を通じてただ一つ、告白の形をとって発表した作品としても知られている。

それは一方で、当時話題となっていた視霊者スウェーデンボルク(EmanuelSwedenborg,1688-1772)に関する時評論の形をとることによって、「好奇心が強くて暇な友人たちの執拗な問い合わせ」<sup>2)</sup>に対するカント自身の見解をもなしている。また一方で伝統的形而上学<sup>3)</sup>、特に靈魂論についてのカントの率直な意見も述べられており、批判期カントの思索の跡を探るためにも重要な位置を占めている。この著作においてカントは、いわゆる視霊現象について、一面では笑うべき迷信、幻想であるとしながら、他面ではそうした物語への愛着を捨てきれないという、分裂した心の葛藤を告白する。こうした二つの方向は、批判期に至ると、一方は『純粹理性批判』の「先験的弁証論」に示されているような、伝統的形而上学の理念の否定として現れ、他方は『実践理性批判』における靈魂の不死の「要請」へと導かれることになる<sup>4)</sup>。

視霊者スウェーデンボルクの出現を直接の切っ掛けとする本書の成立の経緯については、書簡などを通じてよく知られている。カントは、友人であり自分の聴講者でもある一士官から、「フォン・スウェーデンボルクの不思議な事件」を知らされ、<sup>5)</sup>霊について頭から排斥してしまう愚に陥らないように詳細な調査を依頼したことを、1763年8月10日付けのシャルロッテ・フォン・クノープロッホ嬢宛の長い手紙の中で語っている。この手紙の中には、オランダ公使の未亡人ハルテヴィレ夫人が亡夫の未払金を催促されたのに対して、領収書のありかをスウェーデンボルクを通して聴きだす事件や、1756年のストックホルムのズューデルマルムの大火の様子を50哩余りも距っているイギリスのゴテンブルクで、スウェーデンボルクが細かに告げる事件が長ながと述べられている。「私はこの不思議な人物に自分で質問できたらと非常に望んでいるのです」とカントはいい、実際スウェーデンボルクがロンドンで出版したといわれる著書を待ち焦がれて、印刷がおわったら直ちに入手できるよう万端の手筈を整えた旨も伝えている。

このようにカント自身、確かに最初は視霊者スウェーデンボルクに関心と興味をもっていても関わらず、それに対する論評の公表についてはメンデルスゾーン宛の書簡の中で、周囲の人々の懇請による「いわば強いて書かされた著作」で不本意なものとしている。「大部の著作が買い込まれ、しかもっと悪いことには読まれもした」、だが「その努力は無駄となつてはならないであろう」、そのために本書は書かれたという。さらに、「物好きで暇な友人たちからの問い合わせや強要によって押し付けられた、私には有り難くない素材を私は取り扱ってきた」と、嫌悪感を感じさせるようないい方までしている。そして本書の成立に関しては、無理やりに書かせられたという極めて消極的な理由しか存在しないかのような印象を読者に与える。そして本書の成果についても、暇な友人たちの問い合わ

せに不本意ながら答えるという「この軽拳に、私は私の努力を従わせたが、私は同時にその期待を裏切って、好奇心のあるものに対しては報知により、研究者には理性的根拠によって、いずれに対しても満足するまでに何かをなしとげなかった」とまでいうのである。

しかしこの否定的理由と成果の裏に、カント本来の肯定的積極的理由と目的があるのは確かだろう。この徹頭徹尾二義性に貫かれた著書を読み解くためには、カントの真に意図するところを掴まなければならない。そうでなければ、メンデルスゾーンのように「カント氏は形而上学を嘲笑しようとしているのか、それとも視霊などということを信じさせようとしているのかという疑惑に」<sup>6)</sup>陥ってしまう。が、そのことに触れる前に「強請された著作」の意味するところをみておきたい。そうすることで本書の位置づけを明確にし、その理解の助とできるからである。

『視霊者の夢』より一年あまり前に、ケーニヒスベルク近郊の森に山羊の群れをしたがえ、人々に託宣を与える自称預言者があらわれたとき、人々にこの奇妙な現象の鑑定を求められたカントは、みずから足を運んで事実を確かめたうえで、短い解説をハーマンの刊行する『ケーニヒスベルク学事・政治新聞』に「修験者ヤン・パウリコヴィッチ・コマルニキ論」として連載した<sup>7)</sup>。さらに、一般に同様な現象の解明に資するために『脳病試論』を発表している。カントは、「物好きで暇な友人」と評される市民階級のサロンに集まる知的公衆とも交際をもっており、そこに集まる人々からその知的欲求への応答者として仰がれていたのであろう。こういったカントの社会的生活の広がりからも、カントの学問の関心が世間に向かって開かれたものであり、そこから問題を汲み取ろうとする姿勢を浮かび上がらせてもくれる。

『視霊者の夢』との関わりとで、もう少し『脳病試論』を見ておきたい。それは、一貫してこの著作の底流をなす「市民社会批判」の観点の存在である<sup>8)</sup>。この観点は、おなじ人間観察の書とも呼べる『美と崇高の感情に関する考察』との相違をなすとともに、ルソーからの強い影響をはっきりと読み取ることもできる。『脳病試論』では「白然の単純質素」と、「市民社会の技巧的強制と贅沢」との差異が前提とされて論が展開されている。ここに、ルソーの自然状態と文化状態を対置する文化批判を見ることは容易であろう。それを端的に示す箇所として、冒頭の部分をあげたい。そこでは「自然は素朴でつましいものであって、そこではただ月並みで愚直な人間だけが必要とされ、また作り出されるのである」が、市民社会の技巧的強制や贅沢のために、「だじゃれ屋や危弁家、そして時にはまぬけや詐欺師さえ生み出され、またお上品という厚く織られた美しいヴェールが頭脳や心情の隠れた欠陥を覆ってしまいさえすれば見かけは賢そうに、あるいはしとやかになって、思慮も誠実さも不要になるような状態なのである」と、解されている<sup>9)</sup>。そしてこのような逆立ちから精神の病は生じるのであって、技巧的で贅沢な市民社会こそがもろもろの心の病発生の温床であるとされる。

こういった市民社会批判の姿勢は、新しい教授法を述べる『1765-66年冬学期講義計画公告』にもみられる(以下『公告』と略称)。カントは市民社会に蔓延する虚飾を、大学教育の中に見ようとする。非常に飾りたてられた市民社会の時代においては、事細かな知識を身につけることが出世の手段となるからである。そしてそういった知識は「その本性上本来ただ生活の装飾に、そしていわば生活上無くて済むものに数えられるべきもの」とされる。その中で教育された生徒は、「借り物の学問を身につけることになる、それはいわば彼に

貼りつけられているだけ」にすぎない。そこから「自惚れよりも一層盲目的であり、かつ無知よりも一層癒し難い」思想家が育ってしまうと、従来の教育方法を批判する。これに対してカントの考える教育は、要約すれば「思想をではなく思考することを学ぶべき」<sup>10)</sup>のものであり、自分自身で歩むこと、即ち自律的思索を奨めている。そして経験を重視する啓蒙的自律的教育観を提唱する。こうした自律的思惟を妨げる教育の現状への批判は、カントが狭い学問の領域から、世間という一層広い世界の視座を獲得したことによりなされたものといえよう。

こうした現実批判の背後には、ヴォルフ流の理性絶対視の啓蒙主義に対する批判をも読み取ることができる。さらに重要なこととして挙げておきたいのは、カントはこのような虚飾にみちた市民社会をルソーのように否定するのではなく、「啓蒙」において是正すべきであると主張している点である<sup>11)</sup>。ここでは市民社会への「批判」は、「啓蒙」へと導くための手段とされている。こう考えてくると『公告』は、ヒュームとルソーの「批判」を一つに結実した精神を、ほのかにはあるが現わしているともいえよう。しかしここでのカントは、「私の知っていることはふさわしくなく、ふさわしいことは私が知らない」といっているように、まだ単なる常識や経験の立場からの批判に止まり、真なる批判の規準に到達してはいない。積極的な意味における「批判」が可能のためには、批判期におけるような新しい「批判」の規準の確立が必要だったのである。

『視霊者の夢』は、このような背景の中に位置していたのである。それは、人間的ないし人間学的関心と、形而上学をはじめとする学の方法論的な関心という、この時期のカントの二つの主要な関心の流れが合して成立しているのである。したがって、『視霊者の夢』での批判の対象はおおむね次の三つとなる。一つは「感覚の夢想家」であるスウエーデンボルクとその追従者たちであり、二つめは「理性の夢想家」にすぎないヴォルフやクルージウスらの形而上学者たち、そして三つめは「この世の錢箱を開ける」教会である。第一と第二の「夢想家」に対しては、その後も理性の限界を超えた超感性的なるものの取扱いを巡って批判を加えていくことになる<sup>12)</sup>。また教会を主とした勢力とも、90年代の『宗教論』などで鋭く対決することになる<sup>13)</sup>。しかしさらには、第四番めの批判が向けられた相手がある。

それは、当のカント自身にである。この著作が自己告白の方法をとり、ややもすればみずからを嘲笑うかのような言を伴うのは、自分自身に対する批判意識がその背後にある。つまり「批判期に通じる題材に批判期前のスタイル」を取らざるをえないこの時期のカントの、ある面で自虐的な姿を浮き上がらせているのである。ここでのカントの批判意識の徹底性は、「自我をいわば二義性のうちへと引き裂いて」しまうかのようなのである。このような激しいみずからへの批判をくぐり抜けることによって、カントは独断的形而上学と決別したといえるであろう。なぜなら従来の独断的形而上学に対する批判は、部分的なものにしか過ぎず全面的なものとはいいがたいからである。その枠組みを超え出するためには、このような内在的な批判が不可欠だったのである。

このように見てくると、著作の真の意図はおのずと明らかとなってくる。先にも述べたように、カントはその成果によって、好奇心からカントの見解を公にすることを強請した人々を満足させることもできないし、またそこでの対象についての理性的根拠を求める研究者を満足させることもできない。ということは読者を「退屈な回り道をして」、出発点

と「同じ無知の地点にまで」連れ戻したにすぎないことになる。だが「もしこの仕事を生かすべき他の意図がなかったならば、私は自分の時間を空費したのである。私は読者の信頼も失った。 - - - しかし私は実際には一つの目的を念頭においていた。そしてその目的の方が、私の申し立てた目的よりも私には一層重要だと思われ、そしてそれを達成したと私は思っている」と、カントは続けている。

では、カントが念頭においていた、本来のしかも達成したと思っている目的とは何であろう。それは形而上学を、「蝶の羽」によって空虚な空間をさ迷わせるのではなく、「経験と常識の低地」へと転回させ、超越論的認識についてのみずからの無知を知ることによって、「知恵」の立場から新しい形而上学を企てることである。カントにとっては、独断的形而上学も視霊術もともに「経験と常識の低地」に立っていないがゆえに夢に終わってきた。このことを確証することでなによりも、「経験と常識の低地」に立つ自己の理能力そのものの範囲と限界が認識されねばならないのである。

形而上学はいまや理性の夢想に耽ることではなく、「理性の限界に関する学」であり、そうすることで「自己認識の凝縮力」によって「経験と常識の低地」を獲得する学である。さらに理性の提出する超経験的な「課題」を、「搾取された概念」としてでなく「経験概念」との関連づけにおいて迫求することでもある。ここであらためて、カントの「批判主義」の形成へのヒュームの影響の意味が明らかになってくる。このように『視霊者の夢』では、「批判」を「自己認識」とし、「経験概念」と「搾取された概念」を区別し、形而上学を「人間理性の限界に関する学である」と規定することによって、批判期カント哲学への構想が、その輪郭を現わしはじめていたのである。ヴィンデルバントも、形而上学が人間の認識の限界についての学問である点にカントの批判主義の重点を見ようとするなら、批判主義の起源は1766年まで遡らなければならないといっている<sup>14)</sup>。『視霊者の夢』を、「批判主義」の成立の中に位置づけた見解といえよう。

カントが強調した「無知」は、ヒュームの主張したものであった。ヒュームはみずからの哲学の結論として『人生論』の中で、「ある程度までの謙遜な懐疑と、一切の人間能力を越えた主題についての公平な無知(ignorance)の告白こそ哲学に最もふさわしい」と主張している<sup>15)</sup>。ルソーもまた『学問・芸術論』において学芸の害を説くことによって、ヒュームと同じ見解を述べていた<sup>16)</sup>。しかしカントはこの立場に止まりえない。カントはさらにこの「無知」の根拠を探ることによって、一面的な合理主義的啓蒙主義の限界を越えようとするのである。

M.v.ベーンは『ドイツ十八世紀の文化と社会』の中で、ドイツでの合理一辺倒の啓蒙主義の展開は「平板で無味乾燥」な「さらに陳腐な認識」の通俗哲学書を生みだしたにすぎず、「この時代を一瞥してみると、迷信の底流が非常に強く、啓蒙主義という表面現象はこれに比べれば、かすかなさざなみのゆらぎとしか思えない」という<sup>17)</sup>。さらにこういった理性絶対視の啓蒙主義が現実的な力をもてなかったことを次のように難じている。「理性の自由のために戦い、宗教の教条主義を攻撃した啓蒙主義者たちは、信仰をゆさぶることにはたしかに成功したが、迷信にはまったく打撃を加えることができなかった。自分たちは従来の啓示宗教からは解放されたもはや人格化された神など信じないとあれほど誇った当の本人たちが、悪魔の存在を疑おうとはまったくしなかったのである。神はいなくてもすむと彼らは思ったが、悪魔には完全に自分を売りわたしてしまった」と。このことは

迷信だけでなく、当時流行した「秘密結社」などとの関わりからも面白い指摘である<sup>18)</sup>。

ともかくカントは、このように理性を人間の現実から切り離して、学校哲学といった枠の中に置くことで事足りりとする立場に止まることはできない。そうした一方でこの時期のカントは、「視霊者を別の世界の半公民と見なす代わりにあっさり彼らを入院候補者として片付ける」ことにも躊躇を示す。カントは、合理性と非合理性のせめぎあう、生きた人間をこそ学問の対象にすべきと考えているのであり、「無知」の充足によって人間理性の限界を回避するのではなく、むしろその限界に肉薄していくのである。カントをそのように駆り立てたものに、ルソーとヒュームの「批判精神」の影響を見ることもできよう。またカントには後にも述べるように、みずから告白する「道徳的信仰」の偏りがあった。

先に『視霊者の夢』はある意味で、自己批判の書であるといった。その批判を経た自己認識の結果出てきたのが、「偏り」の告白である。カントは、「公民的法律の上から取引の尺度たるべき秤りの虚偽性は、品物と分銅の皿を取り換えれば発見される、そして悟性の秤りの偏頗もまさに同じ技巧によって暴露される、その技巧なしには哲学的判断においても比較された計量から決して一致した結果を、取り出すことはできない」と述べている。

「理性の夢想家」「感性の夢想家」「啓蒙主義の常識」と、様々な立場へと加えられた「批判」はそれぞれの「偏り」を明るみに出す。「思想世界の空中楼阁建築師」とその「類縁者」は、他人の世界を排除して自分の世界に安住し、さらにその無力な「傍観者」は、深みのない理性的思考法に安住していることが、明るみに出された。

そして最終的に、カント自身の思想の「偏り」を明らかにするのである。カントは、「以前には私は一般的人間悟性を単に私の悟性の立場から考察した、今私は自分を自分のでない外的な理性の位置において、自分の判断をその最もひそかなる動機もろとも、他人の視点から考察する」と述べる。他人の視点から自己を批判するという思考の運動を行うことによってカントは、みずからの内にひそむ「偏り」を明らかにするのである。ここに、カントの「啓蒙」観を見いだす上での示唆が二つある。一つは「偏り」の告白による、自律的道徳を軸とした啓蒙主義の見直し。また一つは、判断を下すときには他者の理性を通すという思考方法である。これをヒンスケは、「他者の理性」を通しての「普遍的人間理性の所有となるべく提供される諸認識のより大なる財産の共有者」たることを目指す、プロセスとしての「啓蒙」の発想であるといっている<sup>19)</sup>。これについては、後ほどまとめとして取り上げたい。この二つを突き詰めていくと、人類の永遠の「課題」として「啓蒙」をとらえるという共通点を見出だすことができる。まず「偏り」から見ていきたい。

カントは「悟性の秤りは、やはりまったく偏りがないわけではない、つまり未来への希望という銘をもつその腕木は、その腕木についている皿に乗る軽い根拠でも、他の側のそれ自身ではより大きな重みの思弁を高くはね上げるような機構的な利点をもっている。これは、私が恐らく除きえない、また実際決して除こうとは思わない唯一の不正である」といい、みずからが視霊現象の真理性を迫求せざるをえなかった真意を吐露する。カントは、みずからの「悟性の秤り」の「偏り」を確認するのである。しかし、「未来への希望」を「不正」であると認めながらも、それを安易に捨て去ろうとはしない<sup>20)</sup>。そうした基本的疑問を捨て去ることは、自己の思想を通俗的な啓蒙主義に平板化することになるからである。カントは本書の中で、科学アカデミーが霊界の現象といったようなテーマを決して懸賞課題にはしないであろうということは当てにすることはできるとしながらも、そうする理由

を、アカデミーの会員が霊の出現などを肯定する意見からまったく自由だからではなく、怜利の規則が、好奇心と知識欲とが無差別に提出する疑問を正しく制限するからである、とも述べている。公には不信仰の支配的な流行と非難されながら、「いつでもひそかな信者を有するこの種の物語」という形で、カントは文化と民衆の想像力の深層の亀裂へと迫ろうとするのである。こうしたカントの姿は、超感性的なものを回避し、「此岸的なもの」に人間の知を限ろうとする啓蒙主義とははっきり区別されなければならない。

カントは形而上学の効用の一つとして、「課題が、われわれの知りうるものから規定されているかどうか、そしてその問題が、すべてのわれわれの判断が常にそれを拠り所としなければならない経験概念に対して、どのような関係をもっているかを洞察すること」を挙げている。こうした効用をもたらす限りにおいて、形而上学は、「人間理性の限界の学」とされるのである。この言葉は、みずからの「無知」を自覚し、無限の知識を求めるのではなくその解決が人間にとって重要である課題を選択する「知恵」の立場を表明したものである。さきにも述べたように、ここでいうカントの「知恵」の立場は、理性を経験的に補捉可能なものへと制限する啓蒙主義とははっきり異なる。『視霊者の夢』で英知界と感性界の世界を想定したカントは、英知界に対する人々の関心の根底に「未来への希望」というモチーフを発見した。

カントは、「しかし、死とともにすべてが終わるという思想に堪えることができ、またその高貴な心術が未来への希望にまで高められなかったような誠実な心は、いまだかつてなかったであろう。したがって、来世への期待を善良な心の感情の上に基礎づける方が、逆に心の正しい態度を来世への希望の上に基礎づけるより、人間性と道徳の純粋さに一層適合しているようにおもわれる」と主張する。カントは、道徳を英知界の存在の上に基礎づけるのではなく、英知界に対する人々の関心を道徳の上に基礎づける。もちろんその確固たる基礎づけは、批判期を待たねばならない。批判期では人間の本性との関わりから「素質としての形而上学」が考察され<sup>21)</sup>、人間の究極目的としての「道徳的完成」が主張される<sup>22)</sup>。ともかく、『視霊者の夢』によって人間の本性の底に潜む道徳的欲求に基づく英知界への「道徳的信仰」を確認することによって、カントは「啓蒙に新しい形の基礎」を与えよう<sup>23)</sup>との見通しを確認しようとするのである。それは合理主義一辺倒の啓蒙観を越える、より多面的な人間理解に基づいた「啓蒙」観を切り拓く道でもあったのである。『視霊者の夢』でカントが行った思考の試みは、様々な立場にみずからを置き、その思想を内在的に理解することによって、そこにある「偏り」を明るみに出すものであった。そしてそのような営みは、結果として一つの自己批判となるものであり、みずからの「偏り」をも吐露せしめたのである。その「偏り」については、「道徳的信仰」の構想ということで『実践理性批判』へと展開される。

いま一つ注目したいのは、「他者の理性」を通してものを見るという思考法である。『視霊者の夢』に端的にあらわれたこの思考法は、カントの生涯を一貫しているものなのである。ここにカントの「啓蒙」観と、それを支える理性のとらえ方の特質を読み取ることができる。カントにとって「啓蒙」の哲学は、その内的な推進力をもとにした「有限な理性」の哲学となる。みずからの有限性を白覚した哲学は、理性の目指す真理の全体は人間には与えられず、ただ課せられているという洞察からいとなまれる。それがカントにおける、「普遍的人間理性」の理念である。

先に触れたヒンスケを手引きに以下で本稿のまとめとしたい。ヒンスケによればその理性は、単なる個人的な理性ではなく、すべての人間が分有している理性である。すなわちそれは、「共通な人間理性」「理性一般」であり、「いたる所で」働いており、そこにおいて「各人がそれぞれ投票権」を有するような普遍性をもつのである。他方それは、あくまでも人間の理性である。それは完全な真理を所有することを保証されているような絶対的理性でも、神的理性でもなく、常に個別的たらざるをえない制限された理性にすぎないのである。人間は「他者の理性」を通してのみ、「普遍的人間理性の所有となるべく提供される諸認識のより大なる財産の共有者」たりうることが銘記しなければならない。つまり何人も、どの学校やグループ、どの階級や階層に属していようと、理性を完全なものとして仕立て上げたとか、絶対的な真理を所有しているなどと声高に語ることはできないのである。そのことについてカントは、「何が哲学的に正しいかは、何人もライブニッツからは学びえないし、学んではならない。誰にとっても明白な試金石は人間理性なのであって、哲学の古典的著者というものは存しないのである」<sup>24)</sup>と述べている。

このように「普遍的人間理性」としてさまざまな主体に分かたれている同一の理性を、それにつきまとう誤謬や先入観を徐々に廃棄し、個々の利害の拘束から解放することで自由にするという意味で、カントにおける「啓蒙」は端的に一つのプロセスとしてとらえることができるのである。

#### 註

- 1)カッシーラー、『カントの生涯と学説』、82頁。
- 2)『カント全集』第3巻、191頁。
- 3)カントが信奉していた、ライブニッツ・ヴォルフの伝統的形而上学の主張は内容的に三つに分かれていた。一は形而上学的(合理的)心理学であって、実体(真実在としての「精神」を考え、それ物質(したがって身体)とは独立であり、身体の死を越えて存在いつけること(「靈魂の不死」)を示す。いまひとつは形而上学的(合理的)宇宙論であって、世界が全体として有限か無限か、また世界の出来事の因果的必然的連結が第一原因(「自由原因」)を許すかどうかを考える。最後は形而上学的(合理的)神学(「自然神学」)であって、神の存在証明を取り上げ、神の一般的属性を論じる。
- 4)『カント全集』第3巻「解説」、323頁～324頁参照。
- 5)『カント全集』第17巻、43頁。
- 6)『カント全集』第17巻、74頁、これは1767年にメンデルスゾーンが「一般ドイツ文庫」に書いた『視霊者の夢』についての批評中の言葉である。
- 7)この新聞については、浜田『カント倫理学の成立』、163頁、坂部『理性の不安』、40頁、70頁参照。また「コマルニキ」については、グリガ『カント』84頁以下参照。
- 8)『脳病試論』での市民社会批判の観点については、浜田『カント倫理学の成立』、16頁以下参照。
- 9)『カント全集』第16巻、1966年、115頁。
- 10)『カント全集』第3巻、113頁。
- 11)ここでのルソーとの対比については、高橋昭二、『カントの弁証論』、114頁以下参照。

12)例えば、『思考の方向を定める問題』(1786)『哲学における最近の尊大な語調』(1796)といった著作がある。

13)『カント全集』第9巻、1974年、401頁以下の「宗教論」解説参照、また『カント全集』第13巻、739頁以下の「学部の争い」成立についての解説参照。

14)ヴィンデルバント、『西洋近世哲学史』第3巻、44頁。

15)Hume, ATreatise of Human Nature, P.639.

16)平岡昇訳『世界の名著ルソー』、中央公論社、1966年、20頁以下。

17)マクス・ベーン、永井義哉ほか訳『ドイツ十八世紀の文化と社会』(Max von Behn, Die 18. Jahrhundert Die Aufklärung, Berlin,1922)、三修社、1984年、108頁。

18)田村一郎「ドイツ観念論と秘密結社(その一)」(『鳴門教育大学研究紀要』第1巻、1986年)「同(その二)」(同『研究紀要』第3巻、1988年)参照。

19)ヒンスケ、『現代に挑むカント』、40頁。

20)ゴルドマンは、この「未来への希望」こそ後に、批判期へのカント、ヘーゲル、マルクス、ルカーチへと受け継がれていく「あらゆる真の哲学一般の基本的立場となる」と述べている。リュシアン・ゴルドマン、三島淑臣・伊藤平八郎訳『カントにおける人間・共同体・世界 - 弁証法の歴史の研究 - 』

Lucien Goldmann Mensch,Gemeinschaft und Welt inder Philosophie Immanuel Kants: Studien zur Geschichte der Dialektik, Zürich,1945)、木鐸社、1977年、100頁以下。

21)カントは、「可能的経験」の範囲を越えた認識を求める「形而上学」は拒否する。しかし人間は「形而上学」的な関心や志向を「素質として」もっており、それを否定しすることはできないと述べている。『カント全集』第4巻、100頁以下参照。

22)カントは、「純粹実践理性」の要請としての「魂の不死」と「神の存在」によって、感性的存在としての人間の「道徳的完成」が成就されると「理性的信仰」を説く。

カントが「不死」と「神」との理念の「実在性を想定」したことは、理性の実践的要請を全く幻想のうちにもとめることで、現実界を無視する迷信や狂信といった無制限な実践的認識の拡張から人間理性を守るためである。高峯一愚『実践理性批判解説』、論創社、1985年、251頁以下参照。

23)カツシーラー、『カントの生涯と思想』、87～88頁参照。

24)『カント全集』第12巻、118～119頁。